

回教寺院を出ると、バスの通り道になっている街角に向かった。

広東兄妹と桂林女子が乗るバスは6時半に川主寺を出て、およそ15分後に松藩の街を通過する。それまでに路上に立ってヒッチハイクしながらにバスを呼び止めなければ、昨日チケットを買っておいた成都行きバスに乗りそびれてしまうのだ。

私達はちょっと早めにバスが通過するというポイントに立ち、他の車よりひととき大きいバスの影が道路の向こうに見えてくる度に、皆でいっせいに手を振って呼び止めた。

何台かのバスをやり過ごした後ついに成都行きバスが来た。車掌がチケットを確認すると早く乗るように合図する。皆が行ってしまえば私は一人きりだ。心細さと寂しさを感じている私の気持ちを察したかのように、広東兄が車掌に私も一緒に乗せてくれるようにと交渉してくれたが、満席だからダメだと取り付くシマもない。

仕方ない。これくらいでビビっているようじゃ、これから先ずっと一人で旅する事なんてできやしない。「私は大丈夫だからいいよ～、先に行ってください。」広東兄にお礼を言い、みんなと握手して別れた。彼らに出会えたおかげで松藩には忘れられない思い出ができた。みんなありがとう！！またいつか絶対に会おうね～！！去っていくバスに手を振ると、急に一人ぼっちだ。武者震いがでた…。と思ったら、それは武者奮いではなく寒さによる震えであった。高度の高い松藩の朝は結構寒い。私のバス、早く来ないかな～。川主寺の方向を見つめてバスを待った。

・・・が、バスは来なかった。待っても待っても来なかった。私のバスは7時に川主寺を出るのだから、7時15分くらいにはその道を通る筈なのに、30分になっても、40分になってもバスは来なかった。

「????」

私は途方に暮れかけていた。もう一時間以上も道路に立ってバスが来るたびに手を振り続けているのに。そばに停まっていた車の運転手が見咎めて、車から降りてきた。

「君は何をしてるの？」

人の良さそうなお兄さんだった。事情を説明すると「7時のバスならとっくに通過してる時間だよ。君のバスはもう行っちゃったんだよ」と言う。「絶対そんな筈無いよ！私は6時半からここに立ってるんだから！」私はムキになって言い返した。「とにかくもうちょっと待ってみる！」

彼は、「じゃあ、好きにすれば」というような顔をして車に戻っていった。だが、バスは来ない。とうとう8時を回ってしまった。先ほどのお兄さんが見かねたように再び車から降りてくると、「僕の車に乗りなよ」と言ってきた。「こんな時間まで、バスが来ないなんてありえない。とにかく川主寺のバスターミナルまで行ってみよう。そうすればバスがどうなってるのか分かるから。」

さすがに少し諦め気分になりかけていた私は、今度は素直にならずいた。知らない土地で、知らない人の車になんて乗っちゃっていいのかなあという気持ちも無いでは無かったが、お兄さんの目に下心の影はまったく感じられなかったし、そんな心配は杞憂だった事がすぐに判明した。道路を走っていると所々で道に立っている人が手を上げ車に乗り込んできて、お兄さんにお金を払っている。皆も川主寺に行くらしかった。そうか、このお兄さんは乗り合いタクシーの運転手なんだ。安心すると同時に急にお兄さんに親しみの気持ちが湧いてきた。心配してくれてありがとう。

「バスターミナルの窓口に行ったら事情を聞こう。もし君のバスが松藩で停まらずに行ってしまったのなら、バスのチケット代を返すように僕が話してあげるから。」

お兄さんの親切な言葉を聞いているうちに、だんだんバスの事はどうでも良いような気分になってきた。バスが来なかったおかげで、またこんな親切な人に出会う事ができた。その事の方がスムーズに成都に帰れる事よりも嬉しい出来事に思えてきたからだ。気ままな一人旅の身の上で、今日中に成都に戻れなかったからといっ

てどうという事はないのだ。それよりも窓の外を流れる松藩の景色はとても綺麗だし、昨日泊まった可愛い民宿で、もう一日ゆっくり過ごしても良いような気がして来ていた。さっき迄の不安は何処へやら、お兄さんのおかげですっかり気分が良くなっていたが、彼は私の気持ちの変化などまったく意に介さず、カセットから流れてくる歌謡曲を口ずさんでいた。

川主寺に着くとお兄さんは私を伴って窓口まで行ってくれた。

「彼女はチケットを買って待っていたのに、バスが止まらなかったんだ」

「チケット買ったとき、ちゃんと松藩から乗るって言うておこななかったからよ！」

係りの女性サービス員はいきなりケンカ腰だ。

「言うておいたよ！」

「私は知らないわ！」

口論が始まりそうになったところで、サービス員がもう一度チケットを見直すと、急に口調を変えて何か言い、お兄さんは私を促して窓口から離れると再び車に乗った。

「…？」

バスターミナルの裏手に回り車庫まで行くと、そこに一台のバスが止まっていた。

「君のバスだよ」

「え？」

なんと私が松藩の路上で待ち続けたバスは、故障の為まだ発車しておらず、乗客を乗せたまま整備中との事なのだ。

まったくなんて事なんだ。私をからかう為に松藩の神様が仕組んだのか？思わず大声で笑ってしまった。お兄さん、連れてきてくれてありがとう。もし彼がここまで連れてきてくれなかったら、私はあのまま釈然としない気分バスを諦め、もう一日松藩か川主寺で過ごす事になったのだろう。両手でお兄さんの手を取ってお礼を言った。

「良かったね、気をつけて」

彼は恩着せがましいことも言わず、爽やかに去っていった。後ろ姿に思わず見とれてしまった。トラブル転じて、また一つ松藩での素敵な思い出ができた。

発車時刻を2時間も過ぎた修理中のバスに、タクシーで乗り付け意気揚々と乗り込んできた私を他の乗客達は訝しそうに見つめていた。私の席にはまたしても先客が座っていたが、後部座席にはいくつか空席があったのでそちらに座り、上機嫌だった私は聞かれもしないのに周りのおじさん達に朝のいきさつを話して聞かせた。遅れて乗り込んできた変な乗客がおっちょこちょいの外国人旅行者だと判るとおじさん達も笑いながら私の話を聞いてくれ、和気あいあいとした雰囲気の中に故障も直り、間もなくバスが発車した。あ〜、これで無事に成都に帰れる。

ところがである。松藩を通り過ぎて少したった頃、新たな乗客がバスに乗り込んできた。空いていた空席はすべて埋まってしまい、私の座っていた場所にもチケットの座席番号を指し示しながら、ここは自分の席だと主張する乗客が現れた。仕方なく席を立つと、もう私の座る場所は残されていない。

仕方ない、それなら私も…と、自分の座席番号が記載されているチケットを取り出して、本来の私の場所に座っていた女の子に「ここは私の席だから変わって下さい」と言うと、彼女も「私だってちゃんとお金を払ってこの場所のチケットを買ったのよ！」と主張する。彼女の言い分を聞くと、どうやらバスの発車時刻になっても私が乗っていなかった為、車掌が空席だと判断して新たにバスチケットを発券してしまったらしいのだ。オー

バーブッキングである。あぶない、あぶない。これじゃ松藩の路上で待っていたって、ちゃんとバスに乗れたか判ったもんじゃない。

しかしこうなってしまうと、先に彼女に座られてしまっている私の状況はかなり不利なのだった。残っているのは運転席の脇の肘掛も背もたれもない補助椅子だけである。そこから成都まではまだ10時間近くもバスに乗っていないといけないし、昨夜は広東兄弟や桂林女子と遅くまで遊んでロクに寝ていないからとっても眠い。ハッキリ言って補助席は絶対嫌だ〜！と思ったその時、「日本小姐の方が先にチケットを買っているんだから、そこは彼女の場所だ！あんた席を譲ってやんな！」という力強い援護射撃が飛んできた。先ほどまで談笑していた後部座席のおじさん達だ。悔しそうに席を立つとドア脇の補助席に移っていった彼女には気の毒だったが、背に腹はかえられない。

ラッキー！！ おじさん達有難う〜！ 後部座席にお礼のピースサインを飛ばして自分の席に腰掛ける。今度こそ、やれやれだ〜。いろいろあった朝だったけど、結局すっごく楽しかった。終わりよければ全て良しだ。

でもやっぱり少し気がとがめたので、途中の休憩所でりんごを買うと、席を替わってくれた女の子に半分あげた。女の子はビックリしたような顔で受け取ると、ニコッと笑って「謝謝」と言った。どうやら大丈夫そうだ。そんなに怒ってなかったみたい。ホッとしたら嬉しくなった。

今回の小旅行の目的は九寨溝と黄龍の観光だったが、それよりも旅の道中で出会った多くの中国人との小さな交流の方がより強く心に残る物になってしまった。四娘姑山に行った時もそうだったのだが、結局私は人が好きなのだ。異国の人と国籍や文化を越えて少しでも心が触れ合える事が、私にとっては『何を見た』『何をした』という事柄を大きく越える喜びを感じさせてくれる。それにしてもどうだろう。ちょっと身構えるような気持ちで中国に一人残った私だが、嫌な思いなんて何一つしない。この旅で出会う中国人はみんな明るくて優しい人ばかりだ。

四川省って最高だ〜。きっとこれからも素晴らしく楽しい事がたくさん待っていそうだ。成都にもどって既に発給されている筈のビザを受け取りに行けば、いよいよ本命のチベットエリアに向けて旅立てる。成都に向かうバスの中で、私は今回の小旅行の成功と今後の旅への期待で胸をいっぱいにしていた。(続く)